旭川医科大学研究フォーラム 12　：129 ～ 130，2011

学界の動向

第 54 回日本糖尿病学会年次学術集会報告

羽　田　勝　計*

2011 年 5 月 19 日から 21 日の 3 日間、さっぽろ芸術文化の館、札幌市教育文化会館、ロイトン札幌などの 5 施設で、第 54 回日本糖尿病学会年次学術集会を開催した。

開催予定日を間近に控えた本年 3 月 11 日に東日本大震災が発生し、甚大な被害がもたらされた。一時は年次学術集会の開催自体が危ぶまれたが、門脇孝日本糖尿病学会理事長のご指導を始めとした関係各方面の先生方のご尽力により、無事開催することができた。大震災 2 ヶ月後の開催にも拘わらず、約 9,200 名のご参加を頂いた。

本年次学術集会では、「糖尿病と合併症：克服への Prospects」をテーマとして掲げた。新たな糖尿病診断

基準が策定され、糖尿病の早期診断が可能となった。また、糖尿病治療薬としては約 10 年ぶりの新薬であるインクレチン関連薬が登場し、薬物療法のパラダイムシフトを引き起こした。すなわち、血糖コントロールのみならず、膵 β 細胞の保護をも目指した治療が可能になりつつある。さらに合併症においても、特に腎症ではその寛解すら可能な時代になり、まさに糖尿病と合併症の克服へ期待の日が射してきたと言えるのではないかという観点から、このテーマを設定した。

特別演題としては、従来の招請講演の代わりに、「Leading-edge Lectures」のセッションを設けた。2 日間にわたり、国内から 3 名、海外から 5 名の先生方に最先端のご講演をお願いした。テーマは、iPS 細胞からの膵 β 細胞の再生を始め、ER ストレス、体内時計、糖尿病合併症や糖尿病治療戦略などであり、研究者・臨床家のみならずコ・メディカルの方々にもご満足いただける内容であったと確信している。第 1 日目には、会長講演、学会賞受賞講演を行い、第 2 日目の「特別講演」は、富良野市を中心にご活躍されている倉本聰先生にお願いし、「あたりまえの暮しを求めて」と題

*旭川医科大学内科学講座　病態代謝内科学分野

して、ご講演頂いた。我々日本人が忘れかけている日々の暮しの中にあるかけがえのないものについて、特に大震災後どの様な暮しを求めていくかを、参加者ひとりひとりに静かに問いかけられた貴重なご講演であった。

東日本大震災の発生を受けて企画した、緊急シンポジウム「災害時の糖尿病医療」、特別セッション「災害時のチーム医療」には、多数の方々のご参加と活発なご討論を頂き、被災地における糖尿病診療を支援する様々な試みが提案された。両セッションが、既に日本糖尿病学会で開始されている「災害時の糖尿病医療」に関する調査研究事業の一助となれば、年次学術集会の主催者として存外の喜びである。

「シンポジウム」・「ワークショップ」としては、糖尿病と合併症に関する多くの問題点をカバーできるよう配慮し、22 のシンポジウム、1 つのワークショップを企画した。昨年に引き続き行った「Debate Session」では、活発な討議が展開され、定着しつつあるセッションのひとつと考えられた。「教育講演」では、会場入口に専門医更新のための指定講演として、レコーダーの設置が試みられ、今後の本格的導入に向けて課題抽出の良い機会となった。また、本年次学術集会より、

糖尿病学における若手研究者の育成を目的に、「若手研究奨励賞（Young Investigator Award : YIA）」が創設された。最終発表演題として 15 題が選ばれ、厳正な審査の結果、最終的に 5 名の若手研究者へ YIA が授与された。これらの若手研究者による今後の糖尿病学への貢献が期待されるところである。

一般演題には 2,282 題と、過去最多のご応募を頂き、査読委員の先生方によるご審査の結果に基づき、2,278 題を採択した。1,304 題を口演、974 題をポスターとし、いずれのセッションにおいても、活発な討論が行われた。

また、東日本大震災の復興支援の一助とすべく、義援金を募集した。この義援金は、日本糖尿病協会が受付けておられる義援金に加えさせて頂き、被災した糖尿病専門医療機関に既に配分されている。

「市民公開講座」は、『変わる！「糖尿病」－新しい時代の、新しい糖尿病医療－』、をテーマとして、第 3 日目午後に開催すると共に、7 月 24 日（日曜日）には、旭川市大雪クリスタルホールにおいても開催した。いずれの講座も多数の一般市民のご参加を頂き、糖尿病あるいは生活習慣病に対する一般社会における関心の高さが改めてうかがわれた。

年次学術集会は、日本糖尿病学会北海道支部では 29 年ぶりの開催となり、教室員一同総力を挙げ、また北海道支部の先生方、本学の関連教室の先生方のお力添えを頂き、準備を進めた。東日本大震災の発生 2 カ月後であったにもかかわらず、予想を上回る方々にご参加頂き、成功裏に終了したことは主催者として存外の喜びである。

最後になりましたが、本年次学術集会の開催にあたり、本学から頂いたご支援、ご協力に心から感謝申し上げます。